

Title	辮髪と軍--清末の軍人と男性性の再構築
Author(s)	高嶋, 航
Citation	アジア遊学 (2015), 191: 119-132
Issue Date	2015-11-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/236018
Right	発行元の許可を得て掲載しています。
Type	Journal Article
Textversion	publisher

辮髪と軍服——清末の軍人と男性性の再構築

高嶋 航

中国では宋代以降、兵の地位が低下し、「よい人は兵にならない」とまで言われた。太平天国の乱は伝統的な兵に対する観念に修正を迫るが、根本的な変化は日清戦争の敗北を受けて起こった。国家・民族存亡の危機にさいして「武」の必要性が唱えられ、洋式の軍服・軍靴に身を固めた近代的軍人は一躍、中国の男らしさを象徴する存在となった。

一、伝統社会と兵

「文」と「武」

中国に「よい鉄で釘はつくらないし、よい人は兵にならな
い」という諺がある。こうした兵の地位の低さは日本と大き

たかしま、こう——京都大学大学院文学研究科准教授。専門は近代中国史。主な著書に『帝國日本とスポーツ』（塙書房、二〇一二年）、梁啓超著、高嶋航訳注『新民説』（平凡社、二〇一四年）、『軍隊とスポーツの近代』（書房社、二〇一五年）などがある。

な違いがある。日本では中世から近世まで武士が支配階級を構成し、四民平等となった近代には軍人が少年たちの憧れの的となった。「土農工商」の「士」は、日本では武士を指したが、中国では文人を指した。⁽¹⁾ いっぽう中国では、兵は入れ墨を施され、社会通念上、土農工商からなる四民の社会から排除されていた。土匪や遊民と兵との区別は曖昧で、両者はしばしば立場が入れ替わった。兵は多くの場合、人びとを守る存在というよりは、人びとに危害を与える存在であった。このように社会から排除され、また社会の脅威でもあった兵を、国民皆兵のスローガンのもと、ふたたび社会と一体化させる試みが清末にはじまった。その過程を、男性性の変化に着目しつつ、考察してみたい。

中国で兵の社会的地位が著しく低下したのは宋代のことである。宋代はまた科挙制度が確立し、文人の優位が決定的となった時代でもある。科挙官僚は、「文」に通じることで権力と地位と富を獲得した。貧しい農民でさえ、経済的余裕が少しでもできれば、息子に科挙を受けさせようとした。士は社会的に理想とされ、模範とされる男性であった。女性のあいだに纏足が広まったのは、ちょうどこのころであった。纏足に象徴される弱々しさは、士のパートナーにふさわしいものと考えられた。

中国の男性性は「文」と「武」で構成されていた。⁽²⁾「文」の男性性が支配的になるにつれ、「武」の地位は低下していった。いつぼう、下層の社会では、「好漢」に体现される勇ましさを仁義が重んじられていた。女嫌いな「好漢」は、中国社会に存在する大量の独身男性に男らしさのモデルを提供した。⁽³⁾ただし、「水滸伝」の好漢たちが物語の大部分において兵ではなかったように、兵は男らしさとしての「武」を体现する存在ではなかった。

満洲人と漢人

満洲人が樹立した清朝のもとで、身体之最も目立つ部分に辮髪という服従の印を刻み込まれた漢人男性は、その男性性を大いに傷つけられた。満洲人に対して軍事面で圧倒的劣位

におかれた漢人男性はいつそう「文」へと傾斜していく。やがて、アメリカ人ホルコムが観察したように、服従の印であった辮髪は「中国人の男らしさの象徴」となった。漢人の少年たちは、ちょうどアメリカの少年たちがポケットつきのズボンに憧れるのと同じように、辮髪に憧れた。念入りに手入れされた辮髪は威厳と名誉を示し、それを引っ張ったり切ったりすることは、きわめて重大な侮辱ととらえられた。⁽⁴⁾

いつぼう、満洲人の男性性は「武」を誇り、なかでも騎射の技術を重視した。中国征服が一段落して以降の戦闘で、弓矢はなお有効な武器であり続け、火器は補助的な役割しか与えられなかったからである。こうして弓は満洲人の男性性の核心を構成することになった。日本の武士が鉄砲より刀を重視したことを彷彿とさせる。⁽⁵⁾しかし太平の世が続くと、満洲人のあいだで「武」の気風が廃れ、華美の風潮が生じた。これに危機感を抱いた雍正帝は、「文」より「武」が大事なことに、「文」では漢人に及ばないことを説いて、満洲人の漢化を防ごうとした。さらに雍正帝は満洲人やモンゴル人に武挙の門戸を開いた。乾隆帝も宗室子弟に対して、満洲語と騎射を怠ることがないように釘を刺し、騎射に秀でたものを優遇した。⁽⁶⁾歴代皇帝は「武」が満洲人の権威の源泉であることをよく理解していた。ホルコムは墮落した満洲兵をこう描写している。

彼らは弓矢、槍、火繩銃、ジンジャル銃で武装していた。彼らは兵になるまえから弓術を学んだが、矢を的中させることより、どれだけ相手を威嚇させられるかを重視しており、運動、訓練、規律、効率はあるで存在しなかった、と。嘉慶帝は「武」に精進した最後の皇帝となった。もちろん、漢人の兵の腐敗も深刻で、アヘンの蔓延が拍車をかけた。⁽⁸⁾

二、洋務運動と軍隊の近代化

湘軍と淮軍

一八四〇年、そのアヘンをめぐってイギリスとのあいだで戦争が起こり、清朝は敗北を喫した。一八五〇年に広西に起こった太平天国は瞬く間に勢力を拡大し、一八五三年に南京を攻め落とす。八旗と緑営からなる清朝の正規軍は太平天国軍に有効に対処できず、曾国藩や李鴻章らは湘軍、淮軍を結成してこれに対抗した。この戦いは、男性性をめぐる戦いでもあった。太平天国が支持したキリスト教、長髪、纏足解放は、当時の支配的な男性性に真っ向から対立するものだった。湘軍や淮軍に多くの書生が参加したのは、儒教的秩序を守るためであったが、それはまた自分たちの男性性を守るためでもあった。彼らの参加は、結果的に、兵のイメージを向上させ、男性性の再構築を促す契機となった。もちろん、兵

に対する拒否感はいぜん強く、兵の制服である「号衣」を着るのを恥じるものが多かったため、生員（地方の官立学校の学生。科挙の受験資格をもつ）出身の王鑫^{おうきん}が率先して着てみせる必要があった。⁽⁹⁾太平天国、捻軍などの内乱の結果、従軍を契機に官界に入り、軍功によって出世するものが続出した。淮軍統領の周盛伝はその後直隸提督にまでのぼりつめたが、軍功によって名をなしたのはやむをえずのことで、子孫がこれにならつてはいけなさと論している。⁽¹⁰⁾結局のところ、十九世紀半ばの内憂外患は「文」の優越を揺るがすには至らなかった。曾国藩の諡「文正」、李鴻章の諡「文忠」がそのことを雄弁に物語っている。

太平天国鎮圧の目的が立つと、清朝は正規軍から精兵を選抜して練軍を、また湘軍、淮軍を改編して防軍を組織した。さらに、一八六五年に大規模な近代の軍事工場である江南製造局を設立したほか、金陵機器局、天津機器局、福州船政局を設立して武器、弾薬、艦船の製造をはじめた。馮桂芬は中国人技術者を養成するには、優秀なものに挙人や進士の地位を与えるべきだと考えていた。李鴻章も富貴と功名を与えるに限り、よい人材を集めることはできないと考えていた。⁽¹¹⁾しかしそれは「文」の優越を脅かすものであり、当時の漢人官僚に受け入れられるものではなかった。



図1 西洋人が描いた八旗の兵士 (Arthur Hacker, *China Illustrated: Western Views of the Middle Kingdom*, Tuttle, 2004, p. 107.)

軍事学校

福州では軍事学校(福州船政学堂)も開設されたが、試験に応じたのは地元の貧しい家庭の子弟ばかりであった。一八七四年に同校を訪れたイギリスの軍人シヨアは学生について、「西洋の少年たちと比べると、彼らは知的な面でひけをとることはないが、ほかのすべての面で劣っている。弱くて小さく、わずかの気迫も野心もなく、大いに男らしさに欠ける」「彼らはゲームをするでもなく、娯楽をまったく理解しない」「肉体労働を好まず、爪を汚すのを恐れる」と書き記している⁽¹²⁾。ここからは逆にイギリス海軍の反知性主義的な男らしさをかいま見ることができよう。もともと、李鴻章も彼らを頼りなく思っていたようで、「上品さは十分だが勇ましさに欠ける」と評している⁽¹³⁾。福州船政学堂では、設立当初、厳格な訓練が実施されたが、日清戦争のころには規律は弛緩していた。

北洋水師学堂(二八八〇年設立)、広東水師学堂(二八八七年)、江南水師学堂(二八九〇年)でも軍事教育が実施されていた。李鴻章は北洋水師学堂について、学生が文弱にならないよう筋力を鍛えることを求めており、じっさい一八九四年に入学したある学生は、撃剣、亜鈴、走幅跳、サッカー、水泳などをしたと証言している⁽¹⁴⁾。江南水師学堂でも放課後に全

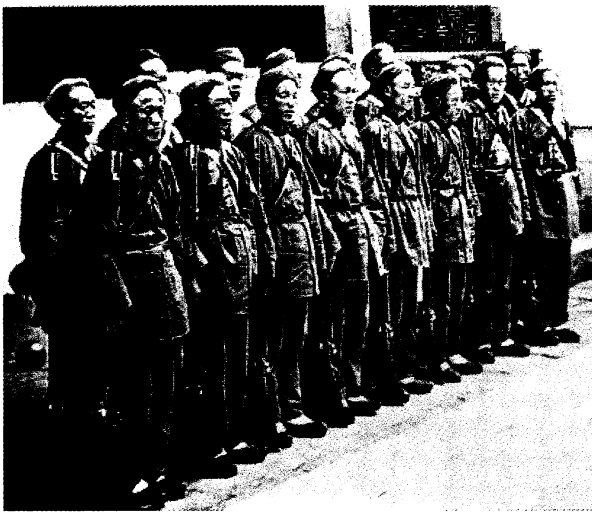


図2 かつて常勝軍で活躍した中国人兵士 (Arthur Hacker, *China Illustrated: Western Views of the Middle Kingdom*, p. 109.)

員西洋式の「跳躍攀躋や各種武芸」により筋骨を鍛えることが章程で定められており、学生たちがボールで遊んでいる様子が「西洋人とそっくりだ」と報道されている⁽¹⁵⁾。身体を鍛錬することは、軍人にとって当然のことのように思えるが、当時は決してそのように考えられていなかった。そのため彼らは主流の男らしさからますます遠ざけられることになった⁽¹⁶⁾。陸軍では一八八五年によりやく天津武備学堂が設立された。

同校の規定によれば、「閑書小説」「淫書淫画」をみることは禁じられていたが、『三国演義』は例外だった⁽¹⁷⁾。軍隊の近代化は、中国の伝統的な「武」と接続した形で進められたが、『水滸伝』が除外されたように、「武」は注意深く選択されたものだった。

三、世紀転換期の曲折

新建陸軍と自強軍

日清戦争の敗北は、中国の男性性にも大きな衝撃を与え、男性性の再構築を促進した。わずか十年ばかりで軍人は新しい男性性の中心的存在となる。

日清戦争中、天津近郊の小站で約五〇〇〇名の兵士が近代の訓練を受けはじめた。戦後、この部隊を引き継いだ袁世凱は名称を「新建陸軍」と改めて規模を拡大した。このとき袁は、「土著」の良民で、年齢は十六歳から二十二歳くらい、身長は四尺八寸(約一五四センチ)以上、読み書きが少々できるものを可、体質が虚弱なものや眼病があるもの、不良な嗜好や犯罪歴があるものを不可とした。「土著」の良民を兵にするということは、社会から排除されてきた兵をふたたび社会へ統合することを意味した。こうして袁は「よい人は兵にならない」という従来の兵士像を打ち破り、新しい軍人像を

構築しようとした。⁽¹⁸⁾ その努力は給与面にも反映され、歩兵の場合、正兵の月給は四・五両であつた。これは縁宮の兵士の三倍にあたり、一般の自作農や私塾の教師よりも高かつた。⁽¹⁹⁾

同じころ、両江総督張之洞が南京に自強軍を創設した。

「都市のずるがしこく、兵士の経験があるもの」は受けつけず、江蘇、安徽の十六歳から二十歳の「土著」の郷民を募集し、すべての兵士に読み書き能力を要求した。梁啓超は自強軍について、そのたくましい身体、清潔な軍服、新しく手入れの行き届いた武器、敏捷な手足、軽快で整つた歩調、厳粛な規律に、観覧していた西洋人の士官や婦人が賛嘆したことを記録している。⁽²⁰⁾ ほどなくして張之洞は湖広総督となり、武漢へ移つたが、同地でも新軍を創設し、将校養成機関である武備学堂を設立した。武備学堂の定員は一二〇名で、科挙、武挙の有資格者や官紳世家の子弟を募集したところ、約四〇〇〇名が応募した。授業料や生活費は公費でまかなわれ、さらに学生には毎月銀四両が支給された。⁽²¹⁾ 良家の子弟にとって軍人となることもはや忌避すべきものではなくなつていた。

武挙の廃止

一九〇〇年の義和団事件で、八か国連合軍は北京を陥落させ、清朝は崩壊の寸前まで追い込まれた。義和団はもろろんのこと、清朝の軍隊が列強の近代的軍隊に太刀打ちできない

ことは明らかだつた（袁世凱や張之洞は戦争に参加しなかつた）。それゆえ、北京議定書締結の一週間ほど前に武挙が廃止されたのは象徴的な出来事であつたといえよう。十九世紀半ばに洋砲の優位が明らかになつて以降、弓刀の技術や石を持ち上げる力を競う武挙を改革せよとの声はいくたびもあがつたが、朝廷は定制であるといつて耳を貸さなかつた。清朝がかたくなに武挙を維持したのは、それがたんに軍事的な問題ではなかつたからである。騎射の技術は満洲人の男性性の根幹であり、容易に改めるわけにはいかなかつた。義和団の敗戦は、この満洲人の最大のプライドを突き崩した。

四、国民皆兵の試み

軍国主義の提唱

北京議定書締結の五か月後、梁啓超が横浜で『新民叢報』を創刊した。創刊号の巻頭に掲げた「新民説」は中国の新しい男性性を構築する大胆な試みであつた。梁が描いた「新しい民」とは、公德を具え、進取冒険の精神に富み、自由や自治を尊重し、進歩的で毅力に満ち、「武」を尚ぶ（男子）国民であつた。「新民説」とならんで『新民叢報』創刊号を飾つた蔡鍔の「軍国民篇」は、古代のスパルタや近代の列強にならつて中国も軍国主義を実施すべきだと主張した。弱



図4 多くの人が見守るなか、揃いの帽子と制服を着て体操する生徒たち（ジョン・スパン、アン・ビン・チン編『フォトドキュメント 中国の世紀』大月書店、1998年、43頁）



図3 辮髪を頭に巻き付け、訓練に励む清軍の兵士（『フォトドキュメント 中国の世紀』46頁）

肉強食、優勝劣敗の世界で中国が生き延びるためには強い国民が必要であった。かくて兵は軍国民として社会に再統合された。中国の支配的な男性性だった「文」は「文弱」として退けられ、「尚武」の精神が求められた。蔡鐸と同じく日本の成城学校（陸軍士官学校の予備校）の学生だった蔣百里は、『新民叢報』に「軍国民之教育」を寄稿し、国家を軍隊の拡大したものを、そして学校を軍隊の縮図とみなした。

清朝は一九〇四年に奏定学堂章程を公布して近代的学校制度を整備したとき、高等小学堂の男子に兵操を課した。揃いの体操服を着て、銃を肩に行進する生徒たちの姿は、まさに軍隊、国家の縮図であり、人びとはそこに未来の力強い軍隊、国家のイメージを重ねあわせた。⁽²²⁾ こうして、新しい国家、新しい国民のイメージは、各地の学校で男子学生によって実施される兵操（兵式体操）を通して可視化されていった。いっぽう、政府と未来の国家を共有できない人びとは、同じく兵操を実践しながら、革命の準備を進めた。

徴兵制の導入

一九〇三年、軍政を総攬し軍隊を標準化するために練兵処が設立され、全国的な新軍の編制がはじまった。一九〇四年には日本の兵役法をモデルとした新軍制方案が完成し、国民皆兵の原則が示された。そして、一九〇五年の江蘇省をては

じめに、各省で徴兵制が導入されていった。徴兵を呼びかける布告は、徴兵を中国古代の「兵農合一」と東西各国の「国民皆兵」によつて正当化し、軍人として国に奉仕することがいかに名譽なことであるかを理解させようとした。

日本とちがつて戸籍が整備されていなかった中国では、徴兵とは名ばかりで、実質的には募兵であり、本人の自発を引き出すためにも、まず「よい人は兵にならない」という固定観念を改めなければならなかった。鎮江では小学生が旗を振り、軍歌を唱つて、彼らを見送つた。エリートたちが率先して徴兵に応じたことも、兵に対する意識の変革を促進した。湖南省の黄陂では募兵九十六名のうち、なんと十二名の廩生（生員のうち官から生活費を支給されるもの）、二十四名の生員が含まれていたといふ⁽²³⁾。

知識人の従軍

知識人たちが軍営に身を投じた背景には、「文」に権力を付与する装置として機能してきた科挙の廃止がある。科挙廃止後、家庭環境がよいものは外国に留学したが、そうでないものは国内の学校に入るしかなかった。しかし、地元で準備できる科挙とは違い、都市の学校に通うには多額の資金が必要であった。そうした負担に堪えられないものは新軍に入った。清代に進士となる平均年齢は四十歳前後で、知県相当の

官職を授けられたが、武備学堂で二年学べば知県と同じ品級の官職が与えられたから、出世の早道とみなして軍隊入りする知識人は少なくなかった。李宗仁によれば、一九〇九年に抜貢の試験が実施されたとき、陸軍小学堂の同級生二名がこつそり受験して合格したといふ⁽²⁴⁾。この逸話は彼らの功利主義的な動機をよく示している。動機はともあれ（同じことは「文」にも言える）、社会のエリートが従軍を厭わなくなつたという事実には、「武」の台頭をみるべきであろう。

五、軍人の表象

軍人への憧れ

一九〇二年に日本へ渡り、陸軍士官学校入学を夢見ていた欧陽予倩は、軍人への憧れをこう語つた。

日本へ行つたとき、心から陸軍を学びたいと思つていて、最も羨ましかつたのが、日本の兵士のズボンにある赤い線であつた。成城学校で制服をつくつたとき、私はどうしても仕立屋にズボンに白い線をつけてもらおうとした。兵士のようでなくても警察にはみえると思つたからだ。しかし仕立屋はとうとう聞き入れず、私を子どもだと思つて、笑つただけだつた⁽²⁵⁾。

唐才常、譚嗣同が祖父の門生だつたこともあり、欧陽は

子どものころから禁書とされていた『鉄函心史』（宋末元初の人、鄭思肖が滅亡した宋をしのいで編んだ詩文集）や『明夷待訪録』（明末清初の人、黄宗羲の書。専制体制を批判）などを読みふけた。学校に入ると、梁木に木馬、拳法に力比べと体を動かすのに熱心で、大酒を飲み、革命を高談した。結局、近視のために陸軍士官学校への入学はかなわず、早稲田大学に入り、劇作家としての道を歩むことになる。

欧陽のような日本の軍隊に対する憧れは、留学生のあいだでひろく共有されていた。軍隊は日本を強国へと押し上げた「力」の象徴であり、清朝を強化する「力」とも、清朝を打倒する「力」ともなりえたからである。

当時の陸軍士官学校は数多くの中国人留学生を受け入れており（海軍兵学校は受け入れなかった）、その数は辛亥革命以前

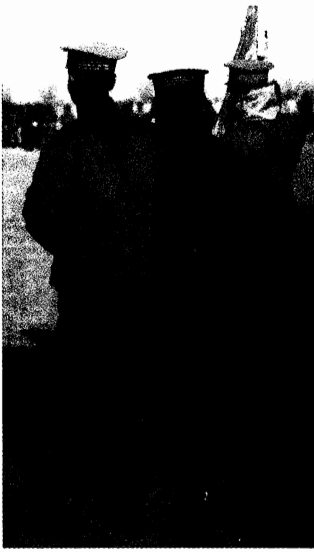


図5 辮髪を垂らし軍帽を被る新軍の軍人（左端）（陳克、岳宏主編『新軍旧影：清末新軍照片文献資料選』天津古籍出版社、2008年、108頁）

に限定しても六七三名にのぼった。日本の軍事的な男性性は、蔡鍔、蔣百里、蔣介石、何応欽らを介して中国の軍隊に影響を及ぼしただけでなく、ひろく中国の社会全般に影響を及ぼすことになる。²⁶⁾

一九〇八年に広西陸軍小学堂に入学した李宗仁は、のちに当時のことを次のように回想している。

当時の我々の服飾はとても奇抜だった。多くの学生は長い辮髪を垂らしていたにもかかわらず、現代式の陸軍の制服と皮靴を身につけていた。今から思うと不釣り合いな感があるが、当時は鼻高々で、立派だと思っていた。日本留学帰りの教官と時代の先を行く少数の梧州出身の同級生のなかには辮髪を切ってしまったものもいた。また後頭部を剃るか短く切るかして、前の髪を束ね、ぐるぐるとうえに巻き付けて、軍帽をかぶるものも少数いた。ただし寝室や練兵場で軍帽が脱げたりすれば、それこそたいそうみっともなかった。²⁷⁾

かっこいい軍服と背中に垂れる辮髪はいかにも不似合いだったが、その姿は当時の清朝の軍人が置かれた立場を反映していた。

洋式軍服の採用

中国の新式軍隊で洋式の軍服がひろく採用されるのは日清

戦争後のことである。袁世凱の新建陸軍や聶士成の武毅軍はドイツ式の軍服、軍靴を採用したが、帽子だけは中国式だった。義和団事件ではそれがあだとなり、洋式の軍服と号令を使っていた武毅軍は義和団から猜疑をかけられてしまう。義和団もまた男性性をめぐる戦争だった。義和団は自らを伝統的な「好漢」になぞらえた⁽²⁸⁾。彼らが破壊した鉄道は、暴力的に中国に踏み込んだ西洋近代の男性性の象徴であり、西洋近代の男性性のもう一つの象徴である大砲は、紅灯照のような義和団の女性たちによって無力化された。そんな義和団を味方につけた政府は各省の軍隊に、洋式の訓練、服装、号令を廃止するよう命じた。

義和団事件後に清朝が新政を開始すると、各省の新軍はふたたび洋式の軍服を採用したが、その様式はばらばらであった。そこで袁世凱と張之洞が協議して統一の基準をつくらうとしたが、軍帽をどうするかで折合いがつかなかった。一九〇四年九月、練兵処と兵部は宮制餉章を定め、近年の戦争形態にあわせ、隠蔽、識別の機能をそなえた動きやすい軍服と、悪天でも照準を合わせられるようひさしのついた軍帽を採用することを明言した。

翌年に制定された服制では、軍官の朝覲、公謁用の大礼服として伝統的な武官の服装である補服、袍褂、戴翎頂、貂帽

が採用され、常服として洋式の軍服、操帽が採用された。すでに一部の軍人たちは軍帽をかぶるのに便利だという理由で辮髪を切っていたが、練兵処は剪髪（辮髪を切ること）を禁止し、辮髪を帽子のなかに入れるよう指示した。この背後には西太后の剪髪に対する猛烈な反対があった。総理練兵処大臣の突動が宦官を使って西太后の意向を尋ねたところ、西太后は「辮髪を切りたいのなら私が死んでからにしろさい」と答えたという⁽³⁰⁾。満洲人の最後のプライドともいえる辮髪に執着したのが満洲人の女性だったことは興味深い。

辮髪をめぐる攻防

当時、剪髪は必ずしも反満と結びついていただけではなかった。すでに戊戌維新のさい、康有為が剪髪易服を主張していた（康はアヘン、科挙、纏足にも反対していた。これらは中国の文弱の根本原因であった）。皇室の載瀾も一九〇六年に憲政考察から帰国後に剪髪易服への支持を表明した。このほか陸軍部尚書、陸軍大臣を歴任した蔭昌らの支持もあり、陸軍では剪髪が広がっていった。剪髪を主張する人びとは、剪髪を文明、進取、富強、衛生、経済、尚武に、辮髪を野蛮、落後、貧弱、不潔、不経済、文弱、保守に結びつけた。剪髪は文明化、近代化の一表現であり、満漢の区別はなかった。革命派も、文明化、近代化を目指す点は同じであった（それゆえ伝

統的な漢族の髪形である総髪にすることは主張しなかった。しかし、清朝がかたくなに剪髪を拒否したことで、野蛮な辮髪は満洲人との結びつきが強まり、剪髪と革命が同一視されるにいたる。⁽³¹⁾

洋式軍服に対する抵抗

象徴的性格の強かった辮髪とちがいで、軍服はより実用的な理由から洋式化（＝文明化、近代化）が進むが、それでもすんなりと受け入れられたわけではなかった。一九〇六年秋に彰徳で南北新軍の演習がおこなわれたさいに関兵大臣が洋式の軍服を「あまり壯観ではない」とみなしたことから、湖北新軍では「体制を崇び観瞻を壮んにす」るために袍褂に取り換えることになった。また同年十二月に両広総督周馥は新式の軍服で挨拶にきた軍官を叱責した。軍官たちは新総督が衣食住すべてに西洋式を好むという情報を耳にしたのでわざわざさそうしたのだが、節約を重んじる新総督は高価な軍服が気に入らなかつたのである。

洋式の軍服がなかなか普及しなかつた背景には、高価であるほかに、「文」を重んじ「武」を軽んじる気風が根強かつたことが挙げられる。武官にとつて、袍褂を着ることは依然然も威厳がないように感じられた。そこで政府は重文軽武を

是正するために、武官の品級を文官より高くし、給与を改善し、武官の身分にふさわしい軍札や軍法を制定した。⁽³²⁾
新軍への期待

新軍が權威を確立しつつあつたことは、西洋人の目から見ても明らかであつた。イギリス大使館附武官のペレイラ少佐は、一九〇八年に第三鎮の軍人について「男たちの待遇はよく、定期的に給料を受け取っている。そして疑いもなくこの軍隊は、よその軍隊と同様に人びとに歓迎されるようになってきている」と述べた。またペレイラの友人でジャーナリストのモリソンは『タイムズ』に「おそらく、現代中国で観察できる最も大きな変化は、これまで侮蔑されてきた軍人という職業に対して示されている名誉であろう。……兵士たちはいまや自分たちの軍服に誇りを持ち、ライフル銃の手入れを怠らず、スマートで礼儀正しい」と記した。⁽³³⁾ 同様の評価は、雲南のような辺境の省でも見られた。雲南の新軍はわずか二年あまりのあいだに、唯一の武器といえばアヘン用キセルだけという寄せ集めの部隊から、軍服を着て、よく訓練され、素晴らしい体格をもち、すぐに実戦に投入できる一万人の軍隊へと変貌を遂げていた。⁽³⁴⁾

中国では人びとのふるまいや服装に社会秩序が反映し、また逆に社会秩序はふるまいや服装を通して体现されると考え

られてきた。四民社会から排除された兵は、洋服の軍人というまったく異なる姿で人びとの前に立ち現れた。彼らは安定した社会を不安定化させる存在ではなく、弱肉強食の世界のなかで社会を守る存在となった。言い換えれば、社会秩序の破壊者から社会秩序の守護者へと変身を遂げたのである。かくて、時代に取り残された旧式の軍隊は、徐々に解体され、一部は新軍や巡防營に組み込まれていった。

「文」と「武」の再構築

民族・国家滅亡の危機は、「文」優位の伝統的な男性性をゆさぶり、科擧の廃止が「文」の優位性の基盤を根本的に突き崩した。「文」にかわって新しい男らしさを体现する存在となったのが新軍の軍人であった。なかでも彼らが着ていた洋式の軍服はその象徴であった。軍服は兵操用の服として、学校だけでなく、自衛や革命のために組織された体育会でも採用された。軍服の着用は、剪髪と同様に、政治的立場を問わなかった。こうして清末には、軍服を着て規律たたく訓練に励む集団を各地で目にする事ができるようになっていった。このような社会の軍事化は、清朝にとって両刃の剣であり、反体制勢力を養成する土壌ともなりえた。それゆえ、清朝は学生や軍人に政治的忠誠を強く求め、軍事化を民族Ⅱ国家に収斂させようとした。しかし、学校や軍隊には、国家体

制の存続よりも民族の存続を重視し、漢人主体の国家の樹立を目指す革命派の勢力が浸透していた。結果的に、新軍の蜂起が辛亥革命をもたらし、清朝を滅ぼしてしまったのである。清朝が推進した社会の軍事化は中華民国のもとでも進行了。辛亥革命にさいして急激に拡大した軍隊は質の低下に悩まされた。一部の兵士は、新軍を特徴づけていた軍服、訓練規律をまったく身に付けていなかった。⁽³⁵⁾ 対外戦争の不在と内戦の頻発は、軍隊を外国の侵略を防ぐ頼もしい存在から、中国の民衆に危害を与えかねない危険な存在へと逆戻りさせてしまった。権力者にのし上がった軍人は、士紳の協力を得て「軍紳政権」を打ち立てるが、文武の連合体を以てしても、權威の不足を補うことはできなかった。「軍閥」や「政客」などの呼称は明白に否定的ニュアンスを帯びていた。中国でふたたび肯定的な軍人像が現れるのは、一九二〇年代半ばを待たねばならない。⁽³⁶⁾

注

(1) 顧頡剛「武士与文士之蛻化」(『史林雜識初編』中華書局、一九六三年所収)によれば、中国の「士」はもともと「武士」を意味したが、春秋末以降の社会変動のなかで士は民に取り込まれ、やがて「文士」へと変わっていった。それと入れ替わるようにして、兵が登場し、民から分離されていったという。

(2) Kam Louie, *Theorising Chinese Masculinity: Society and Gender*

in China, Cambridge University Press, 2002.

(3) David Ownby, "Approximations of Chinese Bandits: Perverse Rebels, Romantic Heroes, or Frustrated Bachelors?" in Susan Brownell and Jeffrey N. Wasserstrom eds, *Chinese Femininities/Chinese Masculinities*, University of California Press, 2002.

(4) Chester Holcombe, *The Real Chinese Question*, Dodd, Mead, 1900, pp. 174-178. ホルコムは一八六九年に宣教師として来華のち外交官として活躍し、一八八五年に帰国した。

(5) 江戸時代の火器は扱う人の身分によって異なる意味を持っていた。將軍や大名は狩猟のむらに鉄砲を使っても、男性性を脅かされる心配はなかった(アン・ウォルソール「鉄砲のジェンダー——日本近世における技術と身分」(サビーネ・フリューシエトウツクほか編、長野ひろ子監訳『日本人の「男らしさ」』明石書店、二〇一三年))。これに対して、満洲人の皇帝や高官が鉄砲をたしなんだという話はあまり聞かない。

(6) 滕紹威『清代八旗子弟』(中国華僑出版公司、一九八九年)、王凱旋『清代武拳与八旗科拳』(遼寧師範大学学报『社会科学版』三六卷六期、二〇一三年十一月)。満洲人は騎射と歩射の試験に合格しなければ科挙を受けることができなかった。

(7) Holcombe, *op.cit.*, pp. 123-124. Edward J. M. Rhoads, *Manchus & Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China, 1861-1928*, University of Washington Press, 2000, pp. 57-58.

(8) ホルコムは、中国人は冷静で、従順で、頑固で、扱いやすく、運命論者であるから、よく食べさせ、いい服を着せ、よく鍛え、うまく指揮されればいい兵士になるだろうと述べている(Holcombe, *op.cit.*, pp. 145-146)。ホルコムが中国人に見いだしたのは従属的な男らしさであり、そう評価することで自らの男

らしさを確認していたといえる。

(9) 熊志勇『從辺縁走向中心：晚清社会変遷中的軍人集団』(天津人民出版社、一九九八年)四八一—四九頁。

(10) 王瑩瑩「清末知識分子從軍熱現象研究」(修士論文、国防科学技術大学、二〇〇七年)三二頁。

(11) トーマス・L・ケネディ著、細見和弘訳『中国軍事工業の近代化——太平天国の乱から日清戦争まで』(昭和堂、二〇一三年)三八、五三頁。

(12) Henry Noel Shore, *The Flight of the Lapwing: A Naval Officer's Jottings in China, Formosa and Japan*, Longmans, Green and Co., 1881, pp. 228, 234.

(13) いっぽうで、清仏戦争や日清戦争で大いに活躍した卒業生も少なくなかった(王建華『半世雄圖——晚清軍事教育現代化的歴史進程』(東南大学出版社、二〇〇四年)六六一—七〇頁)。

(14) 李鴻章「水師学堂請獎摺」(『李文忠公奏稿』卷五二)、王恩溥「我談談六十三年前的体育活動」(『中国体育史參考資料』三輯、一九五八年五月)。

(15) 「南洋水師学堂考試紀略」(朱有璣主編『中国近代学制史料』第一輯上冊、華東師範大学出版社、一九八三年)五二四、五二七頁。

(16) 北洋水師学堂と江南水師学堂では童試に参加することが禁止されており、学生たちは水師学堂に入った時点で、エリートコースを諦めねばならなかった。ただし、張之洞は広東水師学堂創設のさい、「上進」の道を開くため文武学への参加を許してほしいと奏請している(張之洞「創辦水陸師学堂摺」(『張文襄公奏議』卷二一))。

(17) 杜春和「北洋武備学堂學規」(『歷史檔案』一九九〇年二期)。

- (18) ここでは仮に近代的軍隊の士兵を「軍人」と区別しておく。
- (19) 熊志勇『從辺縁走向中心』六二—六三頁。
- (20) 梁啓超『記自強軍』(『時務報』二九冊、光緒二十三年五月十一日(一八九七年六月十日))。西洋の女性は自らのジェンダー観で中国の男性を見たため、中国の文人よりも兵士に男らしさを見いだす傾向があった(Jane Hunter, *The Gospel of Gentility: American Women Missionaries in Turn-of-Century China*, Yale University Press, 1984, pp. 208)。
- (21) 王瑩瑩『清末知識分子從軍熱現象研究』五頁、張之洞「設立武備學堂摺」(『張文襄公奏議』卷四五)。
- (22) 拙稿「軍隊と社会のはざままで——日本・朝鮮・中国・フィリピンの学校における軍事訓練」(田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社、二〇一五年)。
- (23) 趙治國「晚清兵制変革思想及実践——從『民兵』到『徵兵』」(博士論文、復旦大学、二〇〇八年)、陳孝芬「辛亥武昌首義回憶」(中国人民政治協商會議湖北省委員會編『辛亥首義回憶錄』第一輯、湖北人民出版社、一九五七年)六八頁。
- (24) 江炳靈「座談辛亥首義」(中国人民政治協商會議湖北省委員會編『辛亥首義回憶錄』第一輯)二頁、熊志勇『從辺縁走向中心』六三頁、郭亜平「晚清清軍的軍官制度及其影響」(『天津社会科学』一九八六年三期)、李宗仁口述、唐德剛撰写『李宗仁回憶錄』(廣西師範大学出版社、二〇〇五年)上、二三頁。一九〇五年に科挙が廃止されたあとと抜貢だけは時限つきで続けられた。
- (25) 歐陽予倩「自我演戲以来」(『歐陽予倩全集』上海文艺出版社、一九九〇年)六卷、五一—五六頁。
- (26) 吉澤誠一郎「清末中国における男性性の構築と日本」(『中国・社会と文化』二九号、二〇一四年)。

- (27) 李宗仁『李宗仁回憶錄』上、三五頁。
- (28) Bret Hinsch, *Masculinities in Chinese History*, Rowman & Littlefield Publishers, 2013, p. 134.
- (29) 王桂妹「中国文学中的『鐵路火車』意象与現代性想象」(『学术交流』一七六期、二〇〇八年十一月)。
- (30) 蘇全有、李伊波「從清末辮子革命看政府的危機應對」(『広東工業大学学报』社会科学版、二〇一三年五期)、樊学慶「一九〇五年新軍服制述論」(『軍事歴史研究』二〇〇七年三期)。
- (31) 吉澤誠一郎「清末剪辮論の一考察」(『東洋史研究』五六卷二号、一九九七年九月)。
- (32) 樊学慶「一九〇五年新軍服制述論」(同「清末粵、港地区革命党人的剪髮易服輿論」(『學術研究』二〇〇七年五期))、熊志勇『從辺縁走向中心』五九—六五頁。
- (33) Edmund S. K. Fung, *The Military Dimension of the Chinese Revolution: The New Army and Its Role in the Revolution of 1911*, University of British Columbia Press, 1980, p. 88.
- (34) Edwin J. Dingle, *Across China on Foot: Life in the Interior and the Reform Movement*, H. Holt, 1911, pp. 212-213.
- (35) Fung, *op. cit.*, p. 233. 本稿では新軍の肯定的側面しか言及できなかったが、実際には数多くの問題を抱えており、民国期以降に顕在化する諸問題の潜在的要因となった。
- (36) ジェローム・チェン著、北村稔、岩井茂樹、江田憲治訳『軍神政権——軍閥支配下の中国』(岩波書店、一九八四年)、拙稿「軍隊と社会のはざままで」。